

別冊 おおいだものがたり ～資料館資料編～

■『享保雛』

『大石田雛人形展』より

資料館では2月22日から、『大石田雛人形展』を開催中です。雛人形には「～雛」と様々な呼び名がありますが、今回は大石田に多い享保雛と古今雛について、それぞれの特徴をご紹介します。



二藤部家享保雛

享保雛は、享保（1716-1736）とついているものの、この時代に深い関わりがあるものではありません。その頃から流行し始めたのではないかと明治・大正期の好事家が命名したもので、特に根拠はないようです。しかし古今雛の流行（江戸後期）よりは古く、現存する雛人形の中でも古い様式を示しているといえるでしょう。

享保雛の女雛は、紅花染めの膨らんだ袴が印象的ですが、五衣（いつつぎぬ・十二単）を模した装束を纏っています。腰から下の裾部分を布団のように分厚くすることでその重なりが際立ち、衣それぞれに異なる錦の裂が使用されるので、非常にきらびやかです。また、一番上に着た衣と男雛の衣は多くの場合同じ裂となり、ペアを示すのも面白い点です。顔はやや面長で、吊り気味の目や小さな口といった部位は、写実への意識は薄く、浮世絵の美人を彷彿とさせます。

享保雛に代わるように流行した古今雛は、寛政（1789-1801）頃に誕生しました。古今雛の見どころは、女雛の豪華な衣装でしょう。男雛の方は紫や緑系統の落ち着いた裂なのに対し、女雛は色打掛のような金襴緞子に、袖には色とりどりの細密な刺繍が施されます。比較的大型の人形が多いので、その衣装の絢爛な様子も一際見栄えがします。

ところで、古今雛は生産地により二系統に分類することができます。古今雛は江戸で生れたものですが、京都（上方文化圏）に伝わると独自に発展し、江戸風と京風では少し異なる様式があらわれるようになりました。古今雛は、目にガラス材を嵌める玉眼によりその様式が確立されたといわれています。そのため、江戸風古今雛は誕生初期の頃から本物の瞳のように潤んだ光を持つものでした。一方京風古今雛は、目を彫り込み墨で瞳を描き入れる、描き目という技法が幕末まで採用されています。また、江戸風のすっきりとシャープな輪郭に対し、京風ではふくよかな丸顔です。これは上方で製作されていた享保雛の影響を、京風古今雛がより強く受け継いだためと思われる。さらに、江戸風の女雛は両手を袖に隠してやや前かがみ、京風の女雛は両手を露出し重心は体の中心か後方に置かれているという点も異なります。

以上、ごく簡単に二種類の雛を見てみましたが、両方の雛に共通して、見る角度で表情が変化するという点も忘れてはなりません。雛頭の職人は、その面立ちが最も魅力的に見える場所を想定して製作したはずで、そのベストポジションを探すのも鑑賞の楽しみとなります。また、雛人形の特徴や、それぞれの差異、類似などを意識して鑑賞してみるとそれまでとは違った新たな発見があるかもしれません。是非資料館で、いろいろな種類のおひな様をお楽しみください。

『大石田雛人形展』は4月5日（日）まで



楽がき帳

2月中旬にして積雪がゼロになっていきます。去年の秋の段階で暖冬という予報は出ていましたが、それでも雪国大石田、ある程度は降るだろうし積もるだろうと誰もが思っていたと思います。例年であれば2月号には雪灯ろう街道や小学校スキー大会、スノーシュートレッキングなど雪国らしい記事が並ぶのですが、雪不足のためそれもほとんどなく異例の構成です。そして、雪かきもしないので運動不足にも拍車がかかります。せっかく雪もないのでランニングぐらしいしよう、と思っはいるのですが…。

（あ）

町の人口 令和2年2月1日現在		
世帯数	2,346戸	(-2)
総人口	6,921人	(-24)
男	3,394人	(-10)
女	3,527人	(-14)
(1月中の異動)		
出生	2人	転入 1人
死亡	17人	転出 10人

※この数字は外国人数も含めた数字です。